

## 行脚を通して伝わる 「神仏の慈悲」

《前号の続き》

『五坊寂靜院』でのお参り。五味上人との出会い。高野山最終日にして、様々な出会いとご縁を、神仏様から頂戴することで、「有り難い」という気持ち、体験を通して、更に一層深まりました。

五味上人と別れ、宿坊である『蓮華院』に向かう道中、ふと気がつけば、あれだけの大雨も、いつの間にか曇り空に変わり、穏やかな空気が漂っていた。

余談ですが、のちに私が真成寺に戻り、高野山に参詣に行くという知り合いがおりましたので、「ぜひ『五坊寂靜院』も立ち寄り、お参りしてきて下さい」と、お勧めしたのですが、不思議なことがありました。その方は『五坊寂靜院』に参詣しようと、訪ねて行くも、なぜか『五坊寂靜院』の「影も形も見つけることが出来なかった」…近辺を探し廻るも、結局参詣することが出来なかった」と言つのです。その報告を受け

た時、私は信じられませんでした。一体どうしてだったのでしょうか？私達の考え得る範囲内、つまり人智の及ばない出来事が、私を『五坊寂靜院』に導いてくれたという事だったのでしようか？確かに、いま思い返してみても、偶然が重なり、あの時の私は参詣することが出来たのでした。

やはり、私達は常日頃、神仏様、日蓮聖人様、守護霊様やご先祖様から見守られている。導き生かされている存在という事なのでしょう？

仏教では「**私達は、生かされている存在である**」と教えられます。「自分で、生きている」ではなく、「生かされている」という捉え方です。

もしかして、私達が《偶然》と思つている様な、不思議な《必然》の積み重ねを、仏様がスーパーコンピューター以上の頭脳で、私達の日常生活の宿命を用意して下さっているのかもしれない。そう考えると、1つ1つの出来事に一喜一憂するのではなく、目の前に起こる出来事に対して、もっと感謝し、謙虚に受け入れていく事が大切なのではないかと思つのです。その時に、今まで当たり前と思つていた様な出来事

に、そつと手を合わせる様な、そんな感動を覚える事があるのかもしれない。

私達は、もつと素直に、もつと正直に、偏見を持たないように、その現実を直視する眼を養いたいものです。そつすれば、実は日常的に降り注がれている、神仏様のお導きに、もつと沢山、そして有り難い気持ちで、気が付ける自分になるのではないかと思ひます。

話を戻します…。

私は『五坊寂靜院』に手を合わせ、再び御題目を唱えながら『蓮華院』に戻りました。『蓮華院』には、修行している若いお坊さんが何人かおられました。その中でも一番若く、目が輝いている**渡邊司清**上人と、その夜、しばし会話をする時間がありました。

「真言宗にも護摩祈祷がある様に、私の日蓮宗にも木剣祈祷があつて…」と、話が弾み、スツカリ意気投合しました。渡邊上人と名刺交換をして、「ぜひ、奥さんや、子供も連れて、富山県に遊びに来られ。富山には美味しいお魚もあるし、体の芯から疲れを癒してくれる、温泉にも招待するから、また熱く語ろうね!」と言つて、手を取り合いました。そして僧侶として、**混迷す**

る現代日本人の心に、我々の存在が一石を投じられるような、素敵な役割を担える、僧侶に成長しましょうと、固い約束を誓い合つたのでした。お互いに、将来の青写真を語り合い、宗派宗旨を越えた、同じ僧侶としての繋がりが出来た事に、ここでも仏様のおはからいの有り難さを感じました。

「心の時代」と叫ばれる、我が日本の混迷を切り開いていく、その一筋の光明を照らし出すのは、やはり私達一人一人が、目に見えない存在への、畏敬の念をスツカリ持つ事が、何より大切な事であると思ひます。

どの分野でも同じ事が言えるでしょうが、同じ人間として、人智の範囲内での思考や行動…その中では、常に地位や名譽を争つような、小さな競争が絶えません。そんな小さな自分自身の中の拘り、自分自身の目の見えない壁を取つ払うことの**実践**、そしてそれを体現していく人生の歩を進めていく事が、私の1つの青写真です。

その意味で、渡邊上人との熱い会話は、私自身を勇気づけてくれる出来事になりました。それから数日後、

渡邊上人との繋がりは、早くも形あるものとなって現れてくることになるのですが…それについては、また別号にて詳しく記したいと思いません。

翌朝、『蓮華院』や渡邊上人に感謝し、高野山を後にした。

次に向かう土地は【京都】です。和歌山県は『高野山』から『京都駅』まで、電車を乗り継ぎ、揺られること約3時間。日本の歴史が息づく京都。そんな、伝統的な神社仏閣が建ち並ぶ京都駅に到着したのは、ちょうど正午過ぎだった。

京都駅に到着した私は、何か違和感を感じた。何に違和感を感じているのか？自分でも分からなかった。

私の母親は、京都出身という事もあり、幼少時より毎年お墓参りにも来ているし、京都には今まで何度も足を運んでいる馴染みのある土地だ。この違和感は一切何なのだろうか？読者の皆さんの中には、今まで京都駅に立ち寄りられたという方も、多くおられると思います。

いわずもがな事ですが、「京都」といえば全国でも有数の巨大都市の1つです。その京都駅は全国でも1、

2を争う巨大駅に数えられます。その巨大駅構内を行き交う人々を眺めていて、その違和感の訳が分かりました。

それは、単純で当たり前の事なのですが、これまでに廻ってきた場所は、大自然の中に溶け込んでいた神社仏閣でしたが、京都は大都市だったのです。

辺りを見渡しても、人、ヒト、ひと…そして近代的なビル建物が覆われた大都市。私は、その環境の違いに違和感を覚えていたのです。

駅に降り立った時、最初に思ったのが、「私の来るところではない」と…。履き物は泥だらけ、お世辞にも綺麗とは言えない僧衣を身に纏（まと）っている私。一方、京都の街を颯爽（さっそう）と歩いていく、小綺麗な服装に身を包んだ老若男女の人々の群れ…。今まで感じた事の無い孤独感というか、淋しい様な、虚しいような…。これは理屈では説明できない感覚だった。こういう心境になる事ってあるのでしょうか？

何はともあれ、気を取り直して、京都で最初の参拝場所は『醍醐寺（だいていじ）』でした。次号へ続く…

台掌 副住職 谷川寛敬

## お花見



桜の木の下で飲食をするのは、神様と人との食事という古代よりの信仰行事の名残りです。でも、数ある花の中でなぜ桜なのでしょう？それは、桜の木が山の神様が降りてくるときの目印になる木として特別に神聖視されていたからだそうです。お花見に付き物のお酒も本来は神様にお供えしたお下がりをみんなでいただくものでした。お花見が盛大に行われるようになったのは、平安時代から。今の京都の二条城あたりに天皇が桜を見物したのが始まりと言われています。そのうち、貴族や武士の間で盛んになりました。現在のように一般人の娯楽として定着したのは江戸時代に入ってからのことです。

## 「ジュンちゃんクイズ」



問一 なぞなぞ問題です  
ママが笑顔になる果物は何でしょう？

問二 雑学問題です  
子供が安心して長時間遊べるよう人形の目に施した工夫とはなんでしょう？

先月の答え

問一 泳げない人  
問二 既婚者だから

